

幼稚園における造形指導・援助に関する事例研究

Art Education in Kindergarten

西川 麻美, 山内 淳子

Asami NISHIKAWA, Junko YAMAUCHI

概要

「表現活動を支える基礎・基本を子どもに伝える指導」と「子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助」の2視点から、幼稚園における造形指導・援助の事例を考察した。「表現活動を支える基礎・基本を子どもに伝える指導」としては、年少児では擬態語などを用いたわかりやすい説明がなされ、望ましい教材の用い方も「お約束」として伝えられていた。年中児では、視覚的にわかりやすい説明の後、その内容を「復習」するような問いかけがなされていた。年長児では、技法について保育者が一方的に説明するのではなく、まず子どもたち自身が考え試行錯誤できるよう促し、子どものアイデア、発見を全体に紹介していくという方法がとられていた。「子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助」としては、年少児・年中児では、保育者は子どもたちを想像（ごっこ遊び）の世界に誘い込むことで、造形活動への意欲を喚起していた。また、どの学年においても、子ども自身の選択の余地が大切に残されていた。年中児、年長児では、子どものアイデアや工夫を賞賛したり、それを周りの子どもたちに紹介したりすることで、独自の表現への励ましがなされていた。

I. 研究の目的

幼稚園、保育所等において、造形表現は、表現領域の1つとして重視されているものの、保育者はその指導のあり方に悩んでいると言われている¹⁾。「保育者の言葉かけは、幼児の造形遊びを左右する重要な要因となる」²⁾とされる一方で、幼稚園や保育所等で実際に行われている造形指導に対しては厳しい批判もあり³⁾⁴⁾、保育者が「自分自身で子どもにふさわしい指導法を見出すことは並大抵のことでない」⁵⁾とも言われている。

村田は、幼稚園や保育所等で行われている造形指導・援助の現状としては、2つの極端な例が見受けられると言う⁶⁾。1つは、「活動の場と材料を与えるだけで保育者による基本的な指導が全く

されず、子どもにまかせきりの例」⁷⁾である。これは、「子ども自身の中に表現する力が十分に内在しているので指導は必要ないと考える立場であり、子どもの自由を絶対視する立場」⁸⁾だと言う。もう1つは、「保育者によって表現の到達目標が設定され、そこに向かう方法も過程もあらかじめ定められた造形指導」⁹⁾である。これは、「大人が教えることでのみ子どもが育つと考える立場であり、保育者の指示や指導に従うことを子どもに求める規範重視型の立場」¹⁰⁾だと言う。そのうえで、村田は、「自由と規範の両方の要素がバランスよく配されることが重要」¹¹⁾であるとしている。「指導によって獲得された知識や技能を活用して、子どもが自分なりのイメージを多様に表現することが造形表現」¹²⁾であり、したがって、「豊かな造形

表現を目指すには、表現活動を支える基礎・基本を、しっかりと子どもに伝える指導が必要になるだろうし、同時に子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助も必要になるだろう」¹³⁾と述べている。

それでは、「表現活動を支える基礎・基本を子どもに伝える指導」「子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助」は、実際の保育場面ではどのようになされているのであろうか。それは、対象児の年齢によっても異なるのであろうか。

以上の関心から、本研究では、「表現活動を支える基礎・基本を子どもに伝える指導」と、「子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助」という2つの視点から、幼稚園で実際に行われている造形指導・援助の事例に考察をくわえていくこととした。考察においては、対象児の年齢による違いにも着目した。

Ⅱ．研究の方法

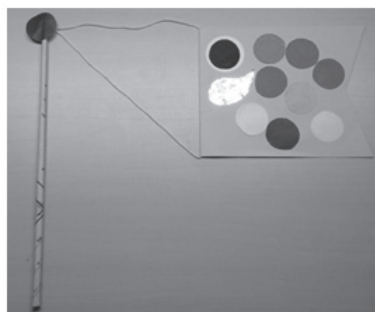
調査期間は、2013年4月～6月である。Y県のX幼稚園の造形をテーマとしたクラス活動の様子を撮影した。撮影したクラス活動は表1の通りである。撮影は、ビデオカメラ1台で行った。その後、動画記録を確認しながら、保育者と子どもの言動を文字化していった。さらにその後、文字化した資料に「表現活動を支える基礎・基本を子

どもに伝える指導」と「子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助」の2つの視点から考察をくわえていった。その際、対象児の年齢による違いにも着目した。

Ⅲ．研究の結果と考察

1. 年少児「こいのぼりの製作」の事例

「のり」という材料を初めて取り入れた造形活動であった。こいのぼりの形に予め切られた色画用紙に、目・ひげ・うろこの形に予め切られた折り紙をのりを使って貼りつけるというもの。うろこの色は様々で、どの色を何枚、どのように貼るかは子どもが決められるようになっていた。参観日の活動であったため、たこ糸がつけられた新聞紙の棒にこいのぼりを貼り付ける作業は、保護者が行っていた。予め準備されていたものは、表2の通りである。



「こいのぼりの製作」作品

表1 撮影したクラス活動

撮影日	学年	造形活動の内容	習得が目指された技法
2013年4月27日	年少（3歳児）	こいのぼりの製作	のりの使い方
2013年5月10日	年中（4歳児）	ミックスジュースの製作	絵の具を使った混色の仕方
2013年6月25日	年長（5歳児）	パズルの製作	長方形からの基本図形の切り取り方

表2 年少児「こいのぼりの製作」の準備物

- ・こいのぼりの形に切られた色画用紙（山折りにするとこいのぼりの形になる。予め折った状態で配付。色は様々で子どもが選択）
- ・丸く目の形に切られた折り紙（白色の中に黒色）
- ・ひげの形に切られた折り紙（金色）
- ・丸くうろこの形に切られた折り紙（色は様々で子どもが選択）
- ・細長く丸めた新聞紙とたこ糸（たこ糸は新聞紙の先についている。直径15cmくらいの輪になっていて、あとでこいのぼりの山折りの部分をはりつける。）
- ・のり（指でとってぬるタイプのもの・一人ひとつ自分用に持っている）
- ・ウサギ、キツネ、クマの紙で作られた人形（日頃から親しんでいる素話でいつも用いているもの・導入の素話で使用）



導入で使用

表3 年少児「こいのぼりの製作」事例において
「子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助」に該当すると思われる部分 その1

保育者	※ 紙で作られたキツネとウサギとクマの人形を用いながら、素話をする。
こいのぼりくん：	えーん、えーん。(声のみ。どこにいるか見えない)
ぴよんこちゃん：	あらあ、誰かが泣いているわ。
こんきちくん：	誰が泣いているんだろう。
こいのぼりくん：	えーん、えーん。(声のみ)
くまたろうくん：	ここだよ、えーん、えーん。(声のみ)
こいのぼりくん：	えっ、ここってどこ？
こいのぼりくん：	空の上だよ。えーん。(声のみ)
保育者：	えっ、空の上？空を見上げると…
こいのぼりくん：	えーん、えーん。(姿をあらわす)(こいのぼりの形に切られた色画用紙を保育者が見せる)
こんきちくん：	あっ、こいのぼりくん、どうしたの？
こいのぼりくん：	えーん、えーん。ぼくのからだ見て。ほら！
保育者：	まあ、こいのぼりさんのうろこがないわ。
こいのぼりくん：	そうなの、ぼくのうろこね、昨日の風で全部飛ばされちゃったんだ。ぼくうろこがないと、お空を上手に泳げないんだよ。えーん、えーん。
こんきちくん：	まあ、それは困った。
保育者：	何かできないかしら。
こいのぼりくん：	えーん、助けてよ。えーん、えーん。
ぴよんこちゃん：	あっ、いいことがあるわ。ちょっと待っててね。
	よいしょ、よいしょ、ちょきちょきちょきちょき。
	よいしょ、よいしょ。いちに、いちに。(丸の折り紙とのりを持ってくる)
	さあ、ぴよんこちゃんは、折り紙のお丸を切って、のりを持ってきました。
保育者：	これでね、こうするの。
	くるくるくるくるぼん。(黒板に貼られたこいのぼりくんに丸い折り紙を貼りながら)くるくるぼん、くるくるぼん。
	すると、じゃじゃじゃじゃじゃじゃじゃじゃじゃーん。(こいのぼりくんを黒板からとって見せながら)
	あっ、すごいすごいよ、ぴよんこちゃん。
こいのぼりくん：	うろこがこんなにきれいにできて、ぼくこれなら泳げる、泳げる。
	やったあ。
	よかったねえ。こいのぼりさん、にこにこです。
保育者：	でも実は僕だけじゃないんだ。
こいのぼりくん：	ぼくのお友達も見て。(こいのぼりの友達を出す)
	うろこがとばされちゃったんだ。
	えっ、そんなにたくさんのお友達がうろこを飛ばされちゃったの？
保育者：	どうしよう。
	ぼくたちだけじゃこいのぼりのうろこ、つけれないよ。困ったなあ。
くまたろうくん：	あっ、いいこと考えた。〇〇組さん到手伝ってもらったらどう？
こんきちくん：	それは、いい考えね。
ぴよんこちゃん：	でも〇〇組さん、こいのぼりさんのうろこ、一緒に作ってくれる？
子どもたち	うん。(うなずく)
保育者	お友達も作れるかな？
子どもたち	うん。
保育者	お友達も作れるかな？
子どもたち	はい。(みんなで元気よく手をあげながら)
保育者	よかったあ。こいのぼりさん。 お友達みんながお空で泳げるように、〇〇組さんにお手伝いしてもらいましょう。 さあ、それでは〇〇組さんが、素敵に作れるか、くまたろうさんにも見ていてもらいましょう。 さあ、うろこが飛ばされてしまっかわいそうなので、今からここにみんなで、うろこをつけたいと思います。

表3は、この事例において、「子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助」に該当すると思われた部分である。保育者は、ウサギの「ぴよんこちゃん」とキツネの「こんきちくん」とクマの「くまたろうくん」が登場する「動物幼稚園」という子どもたちが日頃から親しんでいる素話によって、この製作活動の導入を行っていた。うろこがなくなって泣いていた「こいのぼりくん」を「ぴよんこちゃん」たちが見つけ、もう一度うろこをつけて助けてあげようとするというストーリーであった。

もし保育者が、完成されたこいのぼりの見本を示し、「同じように作ってみましょう」と伝えるだけの導入を行っていたとしたら、どうだっただろう。子どもの興味・関心や意欲とは関係なく、保育者に言われたように作るというだけの製作になってしまったかもしれない。もっと言えば、「作りたくもないのに、やらされている」という意識になってしまった子もいたかもしれない。しかし、表3のような導入を行うことで、子どもたちは、日頃から親しんでいる「動物幼稚園」のお話の世界に入りこみ、想像を膨らませながら、「こいのぼりくん」たちのためにうろこをつけてあげようという、製作への意欲をもてたのではないか。「作ってみたい!」と子どもたちが自然に思うこ

とで、表現活動は自主的なものになっていくのだと思われる。「独自の表現」という段階にはまだ遠いかもしれないが、想像の世界を楽しみながら、子どもたちが自ら作りたいと思えるような工夫が3歳児の発達に合わせてなされているという意味では、興味深い導入である。

また、活動の中では、表4のような場面もあった。ここでは、「だんだんこいのぼりさんもうれしそうになってきましたね」という、子どもたちの想像の世界を大切にした言葉がけがなされていた。また、「何色がいいかな」という言葉にあらわれているように、様々な色のうろこを、何枚、どこにどのように貼るか、子どもたちが自由に決められるようにすることは、3歳児なりの「独自の表現」に励ますための援助としてとらえることができると思われる。

次に、「表現活動を支える基礎・基本を子どもに伝える指導」に該当すると思われた部分を表5に示した。

表5に見るように、指にとってぬるタイプののりの使い方について、人差し指一本でするとよいこと、のりの量、少しつけて指でのばすことなどを丁寧に伝えていた。人差し指についても「おまじないの一本指」「ちんぷいぷいのえーいをする、一本指」と言ったり、のりを伸ばすという作

表4 年少児「こいのぼりの製作」事例において
「子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助」に該当すると思われた部分 その2

保育者	さあ、だんだんこいのぼりさんもうれしそうになってきましたね。 さあ、何色がいいかな、くーくる。くーくるだよ。何色がいいかな。
-----	---

表5 年少児「こいのぼりの製作」事例において
「表現活動を支える基礎・基本を子どもに伝える指導」に該当すると思われた部分

保育者	まず、おめめをつけてみますね。 さあ、のりをね、つけるおてては、おまじないの一本指なんです。 ちんぷいぷいのえーいをする、一本指。 おかあさん指、出して。
子どもたち	(保育者の真似をして指を出す。)
保育者	そうです。その一本指を使つてのりをつけます。 他のおてても全部いれると、ぐちゃぐちゃしてしまうので、一本指でのりをつけるのもお約束です。 ではつけます。のりの量は、ちょん、これくらいです。(実際につけながら) ちょんってつけるだけで、のりはくるくるすればのびて、きれいに貼れるんです。 のり下紙の上で、のりをつけたら、くーくる、くーくる、くるくるおててを回しながらつけましょう。

業にも「くるくる」といった擬態語を用いたりなど、3歳児にわかりやすい表現が工夫されていた。

2. 年中児「ミックスジュースの製作」の事例

ケーキカラー（8色の固形水彩絵の具）を使った造形活動であった。ケーキカラーにもともとある色を混ぜ合わせて、水色・ピンク・オレンジ・紫・黄緑の5色を作り、白い画用紙に予め描かれている5つのコップに色を塗り、ミックスジュースを表現していくというもので、予め準備されていたものは、表6の通りである。



「ミックスジュースの製作」作品

表7は、この事例において、「子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助」に該当すると思われた部分である。保育者は、色水を見立て、「ジュース屋さんをしてみん

表6 年中児「ミックスジュースの製作」の準備物




<ul style="list-style-type: none">・ 5つのコップが描かれた白い画用紙・ ケーキカラー（本体のパレットに固形水彩絵の具8色が置かれていて、それを筆でとり、蓋の内側のパレットで薄めたり混ぜたりする・一人ひとつ自分用に持っている）・ 色水（赤・白・青・緑・黄）を入れたペットボトルと空のゼリーカップ <p>（導入時、色の混ざる様子を示す時に使用）</p> <ul style="list-style-type: none">・ 水色・ピンク・オレンジ・紫・黄緑の折り紙・ 水の入ったコップと布巾（4,5人で座っている、各机の中央に1つずつ用意されている）	 <p>ケーキカラー</p>  <p>色水を入れたペットボトル</p>  <p>空のゼリーカップ</p>
---	---

表7 年中児「ミックスジュースの製作」事例において「子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助」に該当すると思われた部分 その1

保育者	今日は、昨日先生（が）お話しました「ジュース屋さん」をして、みんなで遊びたいと思います。まず先に、じゃじゃーん、M先生のジュース屋さんが開店します。いらっしやいませ、いらっしやいませ。おいしいジュースはいかがでしょうか。（ジュース屋さんに見立てた紙芝居の台を移動させながら）
子どもたち	（「おいしいジュース」と聞き笑う）
保育者	白ジュース。（白色の色水が入ったペットボトルを持って）これは？（赤色の色水が入ったペットボトルを持って）
子どもたち	赤ジュース。
保育者	赤ジュース。じゃあこれは？（黄色の色水が入ったペットボトルを持って）
子どもたち	黄色ジュース。
保育者	これは？（青色の色水が入ったペットボトルを持って）
子どもたち	青ジュース。
保育者	これは？（緑色の色水が入ったペットボトルを持って）
子どもたち	緑ジュース。
保育者	どれがおいしそう？
子どもたち	青。赤。全部。
保育者	さあ、このままでもおいしそうなんですが、これ牛乳？（白色の色水が入ったペットボトルを持って）まかいの牧場の牛乳みたい？カルピスみたい？
子どもたち	うん。カルピスみたい。
保育者	これは？（黄色の色水が入ったペットボトルを持って）
子どもたち	バナナジュース。オレンジジュース。

保育者	オレンジジュースみたい？ レモン味かな？バナナ味かな？ なんだろうこれ？（赤色の色水が入ったペットボトルを持って）
子どもたち	トマト。いちご。
保育者	トマト。いちご。
子どもたち	りんご。
保育者	これは？（青色の色水が入ったペットボトルを持って）
子どもたち	ソーダ。
保育者	あっ、ソーダ！すごい。 海の味する？お空の味する？
子どもたち	（首を振る） ソーダ味。
保育者	じゃあ、これはどんな味するだろう？（緑色の色水が入ったペットボトルを持って）
子どもたち	メロン味。メロンソーダ。（大きな声で次々と答える）
保育者	メロン味、メロンソーダ。 もしかしたらほうれん草の味かもよ。
子どもたち	えーやだー。
保育者	なんでー、ゴーヤの味かもよ。
子どもたち	やだー。
保育者	嫌なのー？ そんなことない。おいしいかもよ。
子どもたち	メロンソーダ。メロン、メロン。
保育者	これだけでもとってもおいしそうなんです、なんと M 先生今日は魔法を使いたいと思います。 ミックスジュース屋さんです。
子どもたち	えっ！（驚いた様子）
保育者	♪ミックスジュース、ミックスジュース、ミックスジュース（歌いながら） のお歌知ってる？
子どもたち	うん。知ってる。
保育者	先生、今日はね、ミックスジュース屋さんをしたいと思います。 じゃじゃーん。（空のゼリーカップを見せながら）
子どもたち	えっ！（驚いた様子）
保育者	コップの中にまず白ジュース。（カップに白色の色水を入れながら）
子どもたち	うわあー。
保育者	たっぷり入れました。
子どもたち	こぼれちゃうよ。
保育者	ここに赤ジュース。（赤色の色水のペットボトルを見せながら）
子どもたち	えっ、えっ。（驚いた様子） 混ぜちゃうのー？
保育者	混ぜちゃうのー。
子どもたち	どうすんの。 ピンク。ピンクになる。
保育者	赤ジュースをちょっとだけ。（白色の色水が入ったカップに赤色の色水を入れながら）
子どもたち	ピンクになーれ、ピンクになーれ。 ピンクになった。おー！
保育者	混ぜます。（混ぜながら）
子どもたち	うおー！（ピンクになったことに驚き、はしゃいでいる様子） ピンクになった！
保育者	うわあー、何色になった？
子どもたち	ピンクー。
保育者	ピンクジュース。 いちごみるくの味がするかな？ ももみるくの味がするかな？
子どもたち	もも。 アイスジュースもあるんだよ。
保育者	ほんとー？
子どもたち	もも。もも。
保育者	白をたくさんに、赤をいっぱい入れた？
子どもたち	ううん。
保育者	ちょっといれたら、これ何色できた？
子どもたち	ピンク。
保育者	ピンクができちゃった。

なで遊ぼう」というかたちで、製作活動の導入を行っていた。

保育者は、ただ「赤色の水」と言うのではなく、「赤ジュース」と言ったり、「トマトジュース」など子どもたちが親しみやすいジュースに見立てたりしていた。さらに、「ミックスジュース屋さんをしたいと思います」と言いながら、色水が混ざり合う様子を見せ、新しく生まれた色水も「ミックスジュース」に見立てていた。子どもたちは色の混ざり方をただ一方的に聞くのではなく、「白ジュース」と「赤ジュース」が混ざったら、何色のジュースができるのだろうかとかわくわくしながら、色水が混ざり合う様子を見ることができ、保育者の導入にすっかり惹き込まれていった。保育者は、「ピンクジュース」を作るのと同様に他の4色（水色・オレンジ・紫・紫）のジュースも作っていった。

その後、表8のような言葉かけがあり、製作活動へと移っていった。

表8に見る通り、「色を塗ってみよう」ではなく、「お手伝いをしてもらいたいんだけどいい？」と

いう、「ミックスジュース屋さん」というごっこ遊びの世界を大切に言葉かけがなされていた。これにより、子どもたちの「やりたい!」という気持ちが一層高まっていったのだと思われる。このように、年中児の事例においても、年少児の事例と同様、「ごっこ遊び」の世界を楽しめるようにすることで、子どもの製作への意欲を高めるという工夫が導入時になされていた。

また活動の中では、表9のような場面もあった。子どもたちの中には、水色・ピンク・オレンジ・紫・紫の5色以外の新しい色を自ら作り出して塗っている子どももいた。その子どもの「こんな新しい色ができた!」という発見を保育者は認め、他の子どもたちへと伝えていた。こうした保育者の関わりは、「独自の表現に向かうための援助」としてとらえることができると思われる。

次に、「表現活動を支える基礎・基本を子どもに伝える指導」に該当すると思われた部分について見ていきたい。表7に示した、ペットボトルに入れた色水をゼリーカップの中で混ぜ、新しい色が作られていく様子を見せるという導入は、「子

表8 年中児「ミックスジュースの製作」事例において
「子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助」に該当すると思われた部分 その2

保育者	先生、みんなでもできるジュース屋さん何かなって考えたの。 そしたらみんなは、〇〇組（年中）になってケーキカラー持ってたじゃない。
子どもたち	うん。ケーキカラーある。
保育者	もしかしたらそのケーキカラーでも、ジュース屋さんができるんじゃないかと思って、
子どもたち	やるー！（子どもたちが次々と答える、はしゃいでいる様子）
保育者	やってみる？
子どもたち	やる、やるー！
保育者	じゃじゃーん。 みんなのジュース屋さんを用意しました。 （コップが描かれた画用紙を見せる） もうストローも入って、さくらんぼもついて、もう準備万端です。 だけど、大変。まだジュースができてないんです。 なのでここでみんなに、お手伝いをしてもらいたいんだけどいい？
子どもたち	うん！

表9 年中児「ミックスジュースの製作」事例において
「子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助」に該当すると思われた部分 その3

保育者	Kくん、緑に茶色を混ぜたそうです。 緑に茶色を混ぜたらお抹茶ジュースになったんだって。 自分で色を混ぜて新しいジュースを作ってもいいよ。
-----	--

表10 年中児「ミックスジュースの製作」事例において
「表現活動を支える基礎・基本を子どもに伝える指導」に該当すると思われる部分

保育者	<p>じゃあ、この色を先生はコップでまぜまぜしました。</p> <p>みんなは、じゃじゃーん。</p> <p>このお皿でまぜまぜをしますよ。(ケーキカラーのパレットを見せる)</p> <p>で、まぜまぜをするときに、大事なね、お約束があるんです。</p> <p>ねえ、見て。</p> <p>白、白ってね、色の中で一番薄い色なんです。</p> <p>白と反対にあるここ何色？(黒色の絵の具を指さしながら)</p>
子どもたち	黒。
保育者	<p>黒って色の中で一番濃い色なの。</p> <p>なので、色をまぜまぜするときは、薄い色に、濃い色を少しずつ入れていくんです。</p> <p>さあ、聞きます。</p> <p>これ。(カップに作ったピンク色の色水をもつ)</p> <p>先生ピンクジュース作るとき、何色先に入れた？</p>
子どもたち	赤ー。
保育者	えー？
子どもたち	白！
保育者	白をたくさんの中に、赤をたくさん入れたっけ？
子どもたち	ちょっと。少し。
保育者	<p>少し入れたでしょ。</p> <p>ってことはみんなのジュース屋さんも一緒です。</p> <p>さあ、見てください。</p> <p>お水をつけます。(机の中央に用意されていた水を入れたコップに筆の先をつける)</p> <p>パンパン(水に濡らした筆を振ること)していいんだっけ？(水に濡らした筆を振る)</p>
子どもたち	だめ。優しくする。
保育者	<p>そう。優しくなでなで。(机の中央に用意されていた布巾に筆をあてて余分な水をとる)</p> <p>こうお水をしぼったら、まずは白をたくさんだったね。</p> <p>白をたくさんお皿に出します。</p> <p>もっともっと欲しいので、お水を入れながら、白をたくさん作ります。</p> <p>作ったよ。</p> <p>いい、そしたら今度は赤を少し作ります。</p> <p>はい、ここに、お皿の中にお水を少し入れます。</p> <p>赤、ちょっとつけたよ。</p> <p>くるくるくる、赤のお水できたよ。</p> <p>そしたら、白のどっちに入れるの？</p> <p>赤いほうに入れるの？</p> <p>白いほうに入れるの？</p>
子どもたち	白。
保育者	<p>そう、白のほうに赤を、ちょびっとつけたよ。</p> <p>まぜまぜまぜ。ほら。</p>
子どもたち	見せて。
保育者	ほら。(パレットを見せながら)
子どもたち	うわあ！ピンク色。
保育者	<p>できてる。できてるよ。</p> <p>どれにしようかな。これにしよう。(コップが描かれた画用紙にできた色を塗る)</p> <p>ほら。おいしい色ができちゃった。</p>

どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助」だけでなく、「表現活動を支える基礎・基本を子どもに伝える指導」の工夫としてもとらえられると思われた。ここでは、子どもたちを惹きつけながら、視覚的にわかりやすく混色の様子が示されていた。このペットボトルとゼリーカップを用いての実演の後には、表10に示すような指導がなされていた。表10に示す部分も、「表現活動を支える基礎・基本を子どもに伝える指導」に該当すると思われた。

表10に見る通り、ペットボトルの色水をゼリーカップに入れて混ぜていったときの様子がどうであったか「復習」するように、保育者は子どもたちに確認の質問をしながら、今度はパレット上で絵の具を混ぜて新しい色を作り出す方法を実演しながら伝えていた。年少児の事例より一層、保育者が問いかけ、子どもが答えるといった、両者のやりとりがみとめられる点は興味深い。そこでは、薄い色に濃い色を少しずつ混ぜていくという、色を混ぜる手順について説明も丁寧になされていた。また、何色と何色を混ぜれば何色ができるのかを製作活動中も視覚的にわかるように、黒板に文字と折り紙でその関係を示すという配慮もされていた。水で濡らした筆を布巾にあてて水分を絞

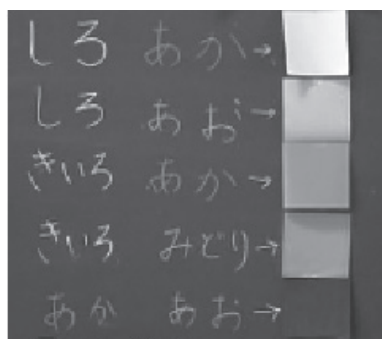
る動作は、「優しくなでなで」といった、擬態語を用いた子どもにわかりやすい表現で伝えられていた。

3. 年長児「パズルの製作」の事例

絵の具をつけたビー玉を転がして予め模様をつけておいた、長方形の色画用紙から、長方形・正方形・三角形(=パズルのピース)を切り取り、土台となる白い画用紙に貼って、好きなものを表現するという活動。長方形から基本図形(正方形や三角形など)を切り取っていくにはどのような方法があるかを学ぶことが、ねらいの1つであった。どのような図形(ピース)を何枚切り取るかは子どもたちが自由に決めていた。ただし、図形を切り取る(パズルのピースを作る)際には、必ず折って切ること・「だいたい」ではなく「正確」な図形を切り取ることは決められていて、その方法についても子どもたちが考えていた。予め準備されていたものは、表11の通りである。

表12、表13は、この事例において、「表現活動を支える基礎・基本を子どもに伝える指導」に該当すると思われた部分である。長方形から正方形を切り取るにはどうすればいいのか、正方形から三角形を4つ作るにはどうすればいいのか、まずは子どもたちがいろいろ試しながら考えるよう導いていた。

もし保育者が長方形から正方形や三角形を切り取るにはどうしたらよいか、その答えをはじめから提示してしまっていたらどうだっただろう。子どもたちは形が変化することのおもしろさに気づくことはできず、ただ保育者の言われた通りに切り取っていくだけの活動になってしまったかもしれない。「どうしたらいいんだろう?」と悩み試行錯誤するという過程があるからこそ、その答えを知ったときの喜びは大きく、その答えも子ども



混色の図

表11 年長児「パズルの製作」の準備物

- ・予め子どもが絵の具をつけたビー玉を転がして模様をつけた、横27cm、縦19.5cmの長方形の色画用紙(色、模様は様々で子どもが選択)
- ・長方形ののり下紙(基本図形の切り取り方を考えるときも使用)
- ・白い画用紙(上の色画用紙から切り取った基本図形を組み合わせるための台紙)
- ・のり(指でとってぬるタイプのもの・一人ひとつ自分用に持っている)
- ・はさみ(一人ひとつ自分用に持っている)

表12 年長児「パズルの製作」事例において
「表現活動を支える基礎・基本を子どもに伝える指導」に該当すると思われた部分 その1

保育者	じゃあこの長方形から、このり下紙の長方形から、正方形になる方法を考えてほしい。 どうやったらできるでしょうか。 ※長方形と正方形という言葉の意味については、この前の部分で説明している。
子どもたち	切る。折る。
保育者	切るかな。どうすればできるかな。 いい、こうじゃないかなって見つけたら先生に教えて。 長方形が正方形になる方法。 ※この後、子どもたちは各自の手元にあるり下紙で試しながら、アイデアを発表していくが、なかなか正解は出ない。
保育者	<p>※しばらくして、正方形を作り出すことに成功したK くん気づく。 おっ、K くんどうなった？ おっ、みてみて。 今、この四角の角をこういうふうに折りました。 そしてここを折ってここを切っちゃう。 (右のように折り、重なり合わない長方形の部分切る) すると、あれれれれ。(折った三角を広げて) どうなってる？</p> <div data-bbox="802 569 1234 695"> </div> <p>長方形から正方形への切り取り方</p>
子どもたち	四角。
保育者	正方形になっていました。 ちょっとみんなやっpegらん。 ほんとになってるかなって。 やってみて。

表13 年長児「パズルの製作」事例において
「表現活動を支える基礎・基本を子どもに伝える指導」に該当すると思われた部分 その2

保育者	これ(正方形)から三角を作りたいときはどうする？
子どもたち	折る、そこをまた。
保育者	この四角から4つの三角作りたいときは？
子どもたち	こうやって折る！ (各自の手元にある正方形に切られたり下紙を、2つの三角形になるように対角線で半分折る)
保育者	こうやって(2つの三角形になるように正方形を対角線で折る)、もう1個。 これだと2つ三角できたね。 4つの三角、同じ大きさの4つの三角作りたいときはどうする？
子どもS	2回折る。
保育者	おー、どういうふうに？
子どもS	(三角を4つになるようにもう1回折る)
保育者	<p>S くんはこれをまた半分に。 三角2つ折りにしてくれました。 これで本当に4つになっていると思う？ 本当に4つになっていると思う？ じゃあちょっと開けて見るよ。 本当に4つになっているでしょうか、いくよ。 いくよ、開けて見るよ。 じゃじゃん。じゃじゃん。 数えて見よう、さんはいい。</p>

保育者 子どもたち	1, 2, 3, 4。
保育者	4つになりました。 Sくんの言う通り4つになりました。 こうやって三角を作ってもいいです。 いい, ここに三角ができたよ。(実際に切る) そしたらここに四角(長方形から正方形を切り取った後に残っていた長方形のこと)があるから, これゴミにしちゃう?
子どもたち	ううん。
保育者	もったいないね。これでもパズルは,
子どもたち	できる。
保育者	できるね。 これ(切り取って残った長方形)をまた半分に折ってもいいし, ここをまた三角に折って, 正方形を作ってもいいし, こうやって三角に折ってまた作ってもいいし。(実際に折って切る) 四角を作ってもいいし, こことここを折って三角を作ってもいいです。 四角と三角のパズルをいっぱい作ったら粘土のふたの中に入れます。 どんな形にするかはいいけど, ゴミは出るはず?
子どもたち	出ない。
保育者	出ないはず。 ただこれを折らないで適当に切るのは?
子どもたち	バツ。
保育者	折って自分で三角や四角になるような形をいっぱい作って, こういう四角でもいいんだよ。 長四角ができました。 これを, 半分, 半分。 こうやってちっちゃい長四角をいっぱい作ってもいいです。 そうしたらここにパズルがいっぱいできるよね。

たちの中に印象深く残るのだと思われる。年長児の発達に合った指導であると考えることができる。

さらに, 切り取った正方形・三角形・長方形などのパズルピースをいよいよ組み合わせていく際には, 表14に示したような言葉かけがなされていた。

保育者は, 電車の例を示したが, 「○○を作しましょう」といった言葉かけはしていない。むしろ「自分で好きなものを作っていいよ」「何ができるかなって考えて作ってみましょう」と言葉を

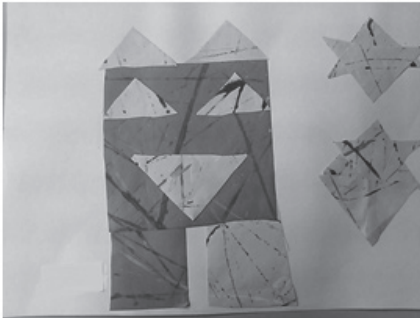
かけている。「基本図形を用いて表現する」という共通の枠組を残しつつも, それぞれの子どもが自分の好きなようにパズルを組み合わせ何かを作り上げるという, 自由で楽しい活動となっていくよう, 子どもたちを励ましていることがわかる。「独自の表現に向かうための援助」としてとらえることができる部分である。

その後, 子どもたちによって完成されていった作品は次頁の通りである。

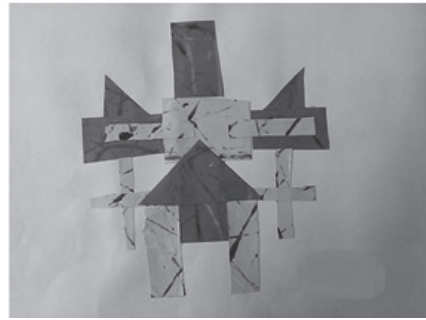
作品1～4はどれも, それぞれの子どもの「独

表14 年長児「パズルの製作」事例において
「子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助」に該当すると思われた部分 その1

保育者	そしたらね, パズルをいっぱい作ったら, この紙(白い画用紙)にこれ(切り取ったパズル)を使って, 何かを作ってください。 こうやってつなげて(四角を何個もつなげる), なんだこれ。
子ども	電車。
保育者	電車にしてもいいし, 自分で好きなもの作っていいよ。 何ができるかなって考えて作ってみましょう。



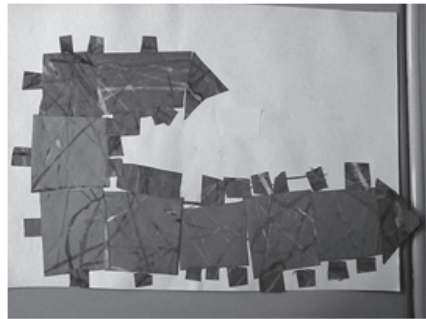
「パズルの製作」作品1：ねこと星



「パズルの製作」作品2：ロボット



「パズルの製作」作品3：きょうりゅう



「パズルの製作」作品4：電車

自の表現」としてとらえることができる。想像を膨らせながら、楽しく生き生きと表現した様子が伝わってくる。三角形で目や口を表現したり、三角形を重ね合わせて星を表現したりする等、三角形の使い方が工夫されている作品1、左右対称に表現されている作品2、帯のような長方形や、小さい三角形、小さい四角形などいろいろな形を駆

使して表現されている作品3、たくさんの小さい正方形が特徴的な作品4など、子どもたちの作品には多様性がみとめられる。

年長児の活動の中では、表15、16、17のような場面もあった。

保育者は、子どもたちが作品を作っている様子を見て回り、その表現を認め賞賛するような言葉

表15 年長児「パズルの製作」事例において

「子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助」に該当すると思われた部分 その2

保育者	(子ども T に向かって) T くんは何ができるの？
子ども T	(三角形を2つ組み合わせて正方形を作っている)
保育者	考え中？
子ども T	家を作ってる。
保育者	あっ、おうちを作るんだ。

表16 年長児「パズルの製作」事例において

「子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助」に該当すると思われた部分 その3

子ども H	できた。
保育者	おー、お家と木。これは何？
子ども H	クリスマスのプレゼント。
保育者	へえー、プレゼントが来たんだ、素敵。

表17 年長児「パズルの製作」事例において
「子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助」に該当すると思われる部分 その4

子ども R	(長四角を3本重ねて正方形を作るやり方を、実際にやって見せながら、保育者に伝える)
保育者	(子ども R に向かって) あー、いいこと考えた。それでも四角になるね。そういう四角の作り方でもいいんだよ。三角ふたつじゃなくても。 (クラスの子どもたちに向かって) はい、R ちゃんは三角2つをつけて四角を作ったんだけど、三角がなかったから、長四角をね、3本重ねてね、四角にするんだって。いい発見です。

かけをしている。自分なりに考え工夫しながら「独自の表現」をしている子どもたちにとって、自分の作品を認めてもらえることは自信となり、更なる表現への意欲となっていくだろう。まさに「子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助」だと思われる。

Ⅳ．総合考察

本研究では、「表現活動を支える基礎・基本を子どもに伝える指導」と、「子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助」という2つの視点から、幼稚園の年少・年中・年長クラスで実際に行われていた造形表現・援助の事例に考察をくわえていった。その主な結果を表18に示した。

表18から見るように、年少児・年中児において、保育者は、「こいのぼりくんを助けてあげよう」「ミックスジュース屋さんごっこをしよう」というように、子どもたちを想像の世界（ごっこ遊びの世界）に誘い込むことで、子どもの造形活動への意欲を喚起していた。これらは、「子どもの自主性が発揮されるための援助」のための工夫としてとらえられた。年少児では日頃から子どもたちが親しんでいる「動物幼稚園」の素話を行うことで、子どもたちも自然と想像の世界に引き込まれていっていたように思う。年中児では、ペットボトルに入れた色水をジュースに見立て、2つのジュースを混ぜることでどんな新しい色のジュースができるのか、子どもたちが歓声をあげながら見入る様子も見られた。

また、どの学年においても、「子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助」として、子ども自身が選択する余地が大切に残されていたように思う。とくに、年中児、年長児の活動

では、子どものアイデアや工夫を賞賛したり、それを周りの子どもたちに紹介したりすることで、子どもが独自の表現に向かうことができるような励ましがなされていた。

「表現活動を支える基礎・基本を子どもに伝える指導」としては、年少児では「ちんぷいぷいのえーいをする、一本指」といった表現や擬態語などを用いて、わかりやすい説明がなされていた。また、望ましいのりの使い方も「お約束」として伝えられていた。「お約束」という言葉を用いることで、年少児にはよりそのことが大切なポイントとして印象付けられるのだろう。年中児では、絵の具を使った混色の方法を伝えるのに、ペットボトルに入れた色水をゼリーカップに注いで見せるといった、視覚的にわかりやすい工夫がなされていた。その後、絵の具を使って実演する際には、ペットボトルに入れた色水がどのように混ざり合ったか「復習」するような問いかけがなされていた。保育者と子どもの双方向のやりとりが、年少児の場合に比べ、一層みとめられた。年長児においては、長方形からどうしたら正方形や三角形を切り取れるか、その答えを保育者が一方的に説明するのではなく、まず子どもたち自身が考え試行錯誤できるよう促し、子どもから生まれたアイデア、発見を全体に紹介していくという方法がとられていた。双方向のやりとりはもちろんのこと、一層子どもたちが主体となり自ら基礎・基本を身に付けることのできるような指導がなされていたと言えよう。これらはいずれも対象児の発達をふまえてのものだろう。

今回考察対象としたのは3事例であったが、「表現活動を支える基礎・基本を子どもに伝える指導」「子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助」の具体例を見ることができた。

表18 年少・年中・年長クラスにおける「子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助」と「表現活動を支える基礎・基本を子どもに伝える指導」

学年	造形活動の内容	習得が目指された技法	子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助	表現活動を支える基礎・基本を子どもに伝える指導
年少	こいのぼりの製作	のりの使い方	導入の素話により、「うろこをなくして泣いているこいのぼりくんを助けてあげよう」という設定を作り、子どもの意欲を喚起。うろこの色や貼る場所は子どもが選択。	人差し指を「ちちんぷいぷいのえーいをする、一本指」と表現したり、「くるくる」といった擬態語を使用したりしながら、望ましいのりの使い方を「お約束」として伝える。
年中	ミックスジュースの製作	絵の具を使った混色の仕方	「ミックスジュース屋さんごっこ」という設定を作り、子どもの意欲を喚起。子どもが作りだす新しい色も賞賛。	ペットボトルに入った色水を混ぜていく様子を実演して見せた後、「復習」するように、子どもたちに問いかけ、発言してもらいながら、絵の具での混色の仕方を伝える。
年長	パズルの製作	長方形から基本図形の切り取り方	画用紙に基本図形を貼っていく際、組み合わせ方は子どもの自由とし、それぞれの表現を賞賛。子どもが思いつく、図形の切り取り方の新しいアイデアも賞賛。	長方形からどうしたら正方形や三角形を切り取れるか（どういう手順で折り切れればよいか）、子どもたち自身に考えるよう促し、子どものアイデアを全体に紹介していく。

今後もこの2つの視点で、さまざまな造形指導・援助事例の考察をしていけたらと考えている。また、幼児の造形活動を計画する際にも、「表現活動を支える基礎・基本を子どもに伝える指導」としてどんな工夫ができるか、どうしたら「子どもの自主性が発揮され独自の表現に向かうための援助」を最大限行うことができるか、といった視点を持つことで、より豊かな造形活動を展開していけるのではないかと考えられた。

6) 村田夕紀「幼児造形指導の試み－豊かな表現を引き出すために－」『四天王大学紀要』第50号(2010年), 229～230頁

7) 同上

8) 同上

9) 同上

10) 同上

11) 同上

12) 同上

13) 同上

註

1) 村田夕紀「幼児造形指導の試み－豊かな表現を引き出すために－」『四天王大学紀要』第50号(2010年), 229頁

2) 若山育代「どのような言葉かけが幼児の発想を支援するか?－見立て絵にみられる4歳児と5歳児の想像的・情緒的表現に着目して－」『美術科教育学会誌』29号(2008年), 631頁

3) 阿部宏行「子どもの発達観から子どもの学びと指導のあり方を再考する」『美術科教学学会誌』30号(2009年), 30頁

4) 磯部錦司『子どもが絵を描くとき』(一藝社, 2006年), 71, 96, 98, 103, 110頁

5) 守野綾子「幼児の描画指導の背景とその悩みに応えて」『拓殖大学論集』163号(1986年), 270頁